幼児の運動遊びに関する研究
－幼児の運動遊びの環境と保育者の意識に関する調査より－

小　黒　美智子

A Study of Exercises In Children's Play:
A Research on The Impressions of Teachers about Children's Play

Michiko Oguro

は　じ　め　に

人間形成の上で幼児期は極めて大切な時期である。日常的な動作や遊びにおける旺盛な好奇心、探索行動が心身の発達を促し、身体発達、知的発達、情緒や社会性といった人格形成の発達の基盤をつくる。特に幼児を取り巻く環境は人的、物的、社会的環境の全てが、相互に関連し合って刺激となり、幼児が自ら活動を展開して成長していくことが大切であるといわれている。

本研究は、幼児の遊びの中で運動を伴う遊び（以下運動遊びという）に着目し、運動遊びが行われる環境としての「場」が、幼児の運動遊びに対する保母の認識にどの様に関連するかを明らかにすることを目的にしている。

データーは、平成７年度に調査を行ったものである。本学研究紀要第27号に一報として、園における幼児の遊びの経験について傾向を知ること、および、遊びにおける運動要素に着目し、幼児は園における様々な運動あそびを通して、基本的な運動をどの程度経験し、どの様な運動要素が不足しているのかを把握するという二項目について報告したが、本号に於いては、保育者の運動遊びに関する意識を中心に分析し報告する。

研　究　の　方　法

1．被調査者

新潟県内の保育園（所）、幼稚園各100園のクラス担任（各園３名）600名を無作為抽出し、415名より有効回答が得られた。（回収率69.2％）

2．調査期間

1996年10月23日～11月7日

3．調査方法

本研究は質問紙法による。質問紙は郵送により配布回収を実施した。保育園（所）、幼稚園

における園児の運動遊びの実施傾向および基本的な運動経験については、クラス担任に1996年4月から9月の6カ月間のクラスの子どもたちの遊びの様子を園の観察記録、記憶などをもとに振り返ってもらい、担任の実感頻度として5段階の回答を得た。

調査者による観察法や、予め観察記録用紙を配布して保育者による観察法が実施できれば、精度の高い調査結果が得られると考えられるが、調査者が長期に渡って園児の活動を観察することは物理的に困難であり、被調査者には多大な負担をかけることになるため実際には困難である。したがって、保育者の経験と実績を手がかりに実感頻度として回答してもらった。

4．質問紙と内容

園児の運動遊びに関する保育者の意識についての設問は、「保育者は園児の運動遊びの充足度についてどの様な認識をしているか」を問う4項目と、「園児の遊びについて意図的な援助が必要な遊びはどのようなものがである」を問う15項目および、「園児の運動遊びの環境がどの程度整っているのか」充足度を問う7項目である。

回答は、「非常に～する」5点、「やや～する」4点、「どちらともいえない」3点、「やや～しない」2点、「全く～しない」1点の5段階評定として、平均値は、1～5点に分布し、5点に近いほどその項目を肯定する傾向が強いことを示している。

5．結果の処理

結果の処理は多変量解析ソフトＨＡＬＢＡＵによりデーター解析を行った。

結　　果

1　保育者の園児の運動遊びに対する意識

(1)　運動遊びの充足度

保育者は園児の運動遊びについてどのような現状認識をしているのであろうか。運動遊びの「多様な経験についての充足度」、「運動量の充足度」、「運動内容のバランスの充足度」、「時間確保の必要度」の4項目について意識を問うた。結果の平均値および標準偏差を表1に示した。平均値からやや否定的な傾向が得られたのは、「運動内容のバランス」（2.97）についての1項目のみで、その他の3項目の平均値は、「多様な経験の充足度」が3.61、「運動量の充足度」は3.40、「時間確保の必要度」は3.52とやや肯定的な意識をもっていることがわかった。

表1　運動遊びの充足度

	項　　目	N	M	S.D.
1	多様な運動経験の充足度	412	3.61	0.86
2	一日の運動量の充足度	413	3.40	0.92
3	運動内容のバランスの充足度	411	2.97	0.80
4	時間の確保の必要度	410	3.52	0.96

(2)　意図的に取り入れる必要度

保育者は、個々の運動遊びについてどの様な遊びを意図的に取り入れる必要があると考えているのかを問うた。運動遊びの分類は、運動形態や様式などの特徴により大雑把に分けることもできるが、本研究では、日常的な個々の遊び名がイメージし易いように細かく15項目に分けた。分類および平均値、標準偏差は表2に示した。

表２　意図的に取り入れる必要度

	項　　目	N	M	S.D.
1	ブランコ、ジャングルジムなどの固定遊具を使った運動遊び	409	3.28	1.05
2	アスレチック系の固定遊具を使った運動遊び	405	3.64	0.93
3	巧技台、跳箱、マット、平均台、大型積み木、タイヤ、段ボール箱などの大型の移動のできる遊具を使った運動遊び	410	4.01	0.78
4	なわ、輪、ボール、棒、新聞紙、布など手具を使った運動遊び	405	4.01	0.81
5	散　　歩	404	4.23	0.93
6	かけっこ、リレーなど走る運動遊び	409	3.96	0.90
7	鬼ごっこ、かくれんぼ、長縄とびなど集団で行う運動遊び	411	4.11	0.91
8	ドッジボールやサッカーごっこ、野球ごっこ、ホッケーごっこなどの集団ボールゲーム	411	3.73	1.04
9	相　　撲	411	3.30	0.94
10	リズム体操、フォークダンス、ダンスなど音楽に合わせて動く運動遊び	405	4.07	0.90
11	花いちもんめ、だるまさんがころんだなどのわらべうたあそびやその他の伝承遊び	407	4.12	0.77
12	三輪車、二輪車、一輪車など乗り物を使った遊び	409	3.02	0.99
13	ウルトラマンごっこ、あんぱんまんごっこ、ままごとなどのごっこ遊び	411	3.41	1.09
14	高い所に登って遊ぶ遊び	410	3.53	0.94
15	水遊び（プール遊び）	411	4.23	0.99

平均値は全ての項目が3.00以上の肯定的な結果が得られ、保育者は多様な運動遊びを意図的に取り入れる必要感を抱いていることが明らかになった。しかし、幼児の運動遊びは心身の発育発達と密接な関係があると思われるので、保育者が年少、年中、年長、混合のどのクラスを受け持っているかにより、15項目それぞれについて、保育者の意図的に取り入れる必要度に差異が見られるかを分散分析により検討した。結果は表３の通りであった。

かけっこリレーなど走る遊びは年少クラスを受け持っている保育者より、年中や年長クラスを受け持っている保育者あるいは混合クラスを受け持っている保育者の方が、意図的に取り入れたいと肯定的な結果が得られた（$P<0.001$）。

ドッチボールやサッカーごっこ、野球ごっこ、ホッケーごっこなどの集団ボールゲームは、混合クラスの受け持ち、次いで年齢が高いクラスの受け持ちほど意図的に取り入れたいと肯定的な回答をしていた（$P<0.001$）。また、ウルトラマンごっこ、アンパンマンごっこ、ままごとな

表3 意図的に取り入れたい運動遊び（クラス別）

項目	クラス	N	M	S.D.
1 ブランコ、ジャングルジムなどの固定遊具を使った運動あそび	年少	132	3.43	0.99
	年中	125	3.15	1.09
	年長	129	3.16	1.04
	混合	20	3.70	0.90
	F値			3.148*
2 アスレチック系の固定遊具を使った運動遊び	年少	130	3.45	0.94
	年中	124	3.67	0.92
	年長	128	3.74	0.92
	混合	20	4.00	0.71
	F値			2.361
3 巧技台、跳び箱、マット、平均台、大型積み木、タイヤ、ダンボール箱など大型の移動可能な遊び	年少	132	3.84	0.87
	年中	126	4.11	0.72
	年長	129	4.05	0.71
	混合	20	4.25	0.70
	F値			3.113*
4 なわ、輪、ボール、棒、新聞紙、布など手具を使った運動遊び	年少	130	3.85	0.87
	年中	126	4.12	0.76
	年長	125	4.05	0.75
	混合	20	4.15	0.85
	F値			2.546*
5 散歩	年少	129	4.11	0.97
	年中	125	4.30	0.90
	年長	127	4.23	0.93
	混合	19	4.53	0.68
	F値			1.364
6 かけっこ、リレーなど走る運動遊び	年少	131	3.72	0.95
	年中	126	4.19	0.76
	年長	129	3.93	0.93
	混合	19	4.16	0.74
	F値			5.231***
7 鬼ごっこ、かくれんぼ、長縄とびなどの集団で行う運動遊び	年少	132	3.95	0.99
	年中	126	4.23	0.83
	年長	129	4.12	0.91
	混合	20	4.30	0.78
	F値			2.077
8 ドッチボールやサッカーごっこ、野球ごっこホッケーごっこなどの集団ボールゲーム	年少	132	3.30	1.15
	年中	126	3.85	0.92
	年長	129	3.98	0.90
	混合	20	4.25	0.77
	F値			11.923***
9 相撲	年少	132	3.23	1.00
	年中	126	3.37	0.97
	年長	129	3.33	0.84
	混合	20	3.25	0.70
	F値			1.918
10 リズム体操、フォークダンス、ダンスなど音楽に合わせて動く運動遊び	年少	130	4.01	0.97
	年中	126	4.16	0.89
	年長	126	4.02	0.82
	混合	20	4.15	1.01
	F値			0.839
11 はないちもんめ、だるまさんがころんだなどのわらべ歌遊びやその他の伝承遊び	年少	131	4.08	0.79
	年中	126	4.19	0.79
	年長	127	4.06	0.73
	混合	19	4.21	1.00
	F値			0.893
12 三輪、二輪、一輪車など乗り物を使った遊び	年少	131	2.95	1.02
	年中	126	3.05	1.04
	年長	128	3.00	0.89
	混合	20	3.35	0.91
	F値			1.783
13 ウルトラマンごっこ、アンパンマンごっこ、ままごとなどのごっこ遊び	年少	132	3.63	1.13
	年中	126	3.52	1.06
	年長	129	3.07	1.00
	混合	20	3.30	0.95
	F値			5.606***
14 高い所に登って遊ぶ	年少	132	3.32	1.02
	年中	126	3.64	0.95
	年長	128	3.59	0.82
	混合	20	3.90	0.77
	F値			3.722**
15 水遊び	年少	132	4.08	1.08
	年中	126	4.29	0.96
	年長	129	4.29	0.93
	混	20	4.45	0.67
	F値			1.444

(***p<0.001 **p<0.01 *p<0.05)

どのごっこ遊びは、年齢の低いクラスの受け持ちほど意図的に取り入れたいと考えていた（P<0.001）。

ブランコ、ジャングルジムなどの固定遊具を使った運動遊び（P<0.05）、巧技台、跳び箱、マット、平均台、大型積み木、タイヤ、ダンボール箱など大型の移動可能な遊具を使ったあそび（P<0.05）、なわ、輪、ボール、棒、新聞紙、布など手具を使った運動遊び（P<0.05）、高い所に登って遊ぶ（P<0.01）の4項目については、全体としては受け持ちクラスによる有意差が見られたものの、受け持ちクラスごとの対比較では、明らかに有意な差とはなってはいない。

(3) 運動遊びの現状と環境の充足度

保育者は、園児が運動遊びを行う場は戸外、室内のいづれが多いと考えているのであろうか。また、園における運動遊びの場は、子どもを遊ばせる環境として十分整っていると考えているのであろうか。環境を子どもたちが運動遊びを十分に行うことができる「空間の広さ」や「散歩に適した環境」、幼児期の平衡感覚の発達刺激として欠くことのできない器械器具を用いた「大型遊具の遊び環境」、リズム感の発達に必要な「リズム体操の遊び環境」の5項目について問うた。

結果の平均値、標準偏差を表4に示した。

平均値は、「戸外で遊ぶことが多い」が3.99、「室内で行うことが多い」が3.30であり、運動遊びは「戸外で遊ぶことが多い」が評価が高くなっている（表4）。

また、園における運動遊びの場は、「リズム体操の遊び環境」のみ平均値が2.23と否定的な結果であり、その他は全て肯定的な結果が得られた。

表4　運動遊び環境の充足度

	項　　目	N	M	S.D.
1	運動遊びは戸外であそぶことが多いか	410	3.99	0.94
2	運動遊びは、室内で行うことが多いか	409	3.30	0.93
3	戸外で運動遊びを行う場合、広さは十分か	410	4.09	1.16
4	室内で運動遊びを行う場合、広さは十分か	411	3.32	1.23
5	近所に散歩に適した場所があるか	412	4.25	0.97
6	マット、跳び箱、鉄棒、平均台、巧技台など大型遊具は、遊び場に常に設置してあって、子どもがいつでも遊べるようになっているか	412	3.42	1.23
7	リズム体操を行う場合の音響設備は、子どもがいつでも操作できるようになってるか	412	2.23	1.38

2　保育者の子どもを遊ばせる環境の充足感と運動遊びに対する意識

前述(3)に示した運動遊びの現状と環境の充足度の内、子どもを遊ばせる環境5項目がどの程度整っているかにより、子どもの運動遊びに対する保育者の意識がどの様に異なるかを検討した。

分析のために、子どもを遊ばせる環境についての5項目それぞれについて、保育者を「環境が整っていると考える群」、「整っていないと考える群」、「中間群」の3群に分けた。

その後、この3群によって、運動遊びに対する保育者の意識にどの様な差異が見られるかを分散分析により検討した。

(1)　環境の充足度と運動遊びの充足度

1）園における戸外遊び場の広さに関する保育者の意識による、園児の運動遊びの充足度4項目における差異を検討し表5に示した。

その結果、運動遊びの充足度4項目全てにおいて有意な差が見られた。対比較の結果、「多様な経験の充足」については、3群それぞれの間に有意差が見られ、環境が整っていると考えているほど評価が高くなった。「運動量の充足」については、環境が整っていない群と他の群に有意差が見られ、環境が整っていない群が評価は低かった。「運動内容のバランスの充足」については、環境が整っていない群と他の群に有意差が見られ、環境が整っていない群が評価は低かった。「時間の確保の必要度」については、環境が整っていない群と環境が整っている群に有意差が見られ、環境が整っていない群が、評価が高くなった。

2）園における室内遊び場の広さに関する保育者の意識による、園児の運動遊びの充足度4項目における差異を検討し表5に示した。

その結果、運動遊びの充足度4項目全てにおいて有意な差が見られた。対比較の結果、「多様な経験の充足」については、環境が整っていない群と他の群に有意差が見られ、環境が整っている群が評価が高かった。「運動量の充足」については、環境が整っていない群と他の群に有意差が見られ、環境が整っている群が評価が高くなった。「運動内容のバランスの充足」については、環境が整っていない群と他の群に有意差が見られ、環境が整っている群が評価が高かった。「時間の確保の必要度」については、環境が整っている群と環境が整っていない群に有意差が見られ、環境が整っていない群の評価が高かった。

3）散歩環境に関する保育者の意識による、園児の運動遊びの充足度4項目における差異を検討し表5に示した。

その結果、運動遊びの充足度4項目全てにおいて有意な差は見られなかった。

4）大型遊具の遊び環境に関する保育者の意識による、園児の運動遊びの充足度4項目における差異を検討し、表5に示した。

その結果、運動遊びの充足度4項目全てにおいて有意な差が見られた。対比較の結果、「多様な経験の充足」「運動量の充足」については、環境が整っていない群と環境が整っている群に有意差が見られ、環境が整っている群の評価が高かった。「運動内容のバランスの充足」については、環境が整っていない群と他の群に有意差が見られ、環境が整っている群の評価が高かった。「時間の確保の必要度」については、環境が整っていない群と環境が整っている群に有意差が見られ、環境が整っていない群の評価が高かった。

5）リズム体操の遊び環境に関する保育者の意識による、園児の運動遊びの充足度4項目における差異を検討し、表5に示した。

その結果、運動遊びの充足度4項目全てにおいて有意な差が見られた。対比較の結果、「多様な経験の充足」「運動量の充足」「運動内容のバランスの充足」については、環境が整っている群と他の群に有意差が見られ、環境が整っている群の評価が高かった。「時間の確保の必要度」については、環境が整っている群と中間群に有意差が見られ、中間群が評価が高かった。

(2)　環境の充足度と運動遊びの意図的に取り入れる必要度

子どもを遊ばせる環境5項目がどの程度整っているかにより、子どもの運動遊び15項目について意図的に取り入れる必要度に関する保育者の意識がどの様に異なるかを検討した。

1）園における戸外遊び場の広さに関する保育者の意識による、意図的に取り入れる必要度15項目における差異を検討し表6に示した。

表５　環境の充足度と運動遊びの充足度に関する意識

環境の充足度	多様な経験についての充足度	運動量の充足度	運動内容のバランスの充足度	時間確保の必要度
戸外遊び場の空間の広さ(a)				
環境が整っていないと考える群(N=64−65)	3.13 0.76	2.88 0.89	2.60 0.74	3.88 0.83
中間群 (N=130)	3.49 0.83	3.40 0.80	2.96 0.75	3.56 0.95
環境が整っていると考える群 (N=212−215)	3.83 0.84	3.56 0.93	3.09 0.79	3.39 0.98
	F=19.75 ***	F=14.67 ***	F=10.16 ***	F=6.82 ***
室内遊び場の空間の広さ(a)				
環境が整っていないと考える群(N=131−132)	3.33 0.83	3.11 0.92	2.72 0.73	3.73 0.91
中間群 (N=183−185)	3.75 0.82	3.56 0.84	3.09 0.84	3.46 0.99
環境が整っていると考える群 (N=94)	3.72 0.89	3.48 0.97	3.09 0.71	3.39 0.90
	F=10.94 ***	F=10.22 ***	F=9.97 ***	F=4.26 *
散歩に適した環境(a)				
環境が整っていないと考える群(N=32−33)	3.58 0.82	3.21 0.84	2.81 0.92	3.75 0.90
中間群 (N=161−162)	3.52 0.78	3.42 0.81	2.95 0.74	3.51 0.90
環境が整っていると考える群 (N=215−217)	3.69 0.92	3.42 1.00	3.01 0.81	3.50 1.01
	F=1.72	F=0.77	F=0.99	F=0.96
大型遊具の遊び環境(b)				
環境が整っていないと考える群(N=33)	3.30 0.90	3.06 1.07	2.52 0.99	3.85 1.05
中間群 (N=284−286)	3.58 0.82	3.37 0.86	2.98 0.74	3.55 0.97
環境が整っていると考える群 (N=92−93)	3.82 0.93	3.59 0.99	3.11 0.80	3.32 0.86
	F=5.09 **	F=4.49 *	F=7.05 ***	F=4.22 *
リズム運動の遊び環境(b)				
環境が整っていないと考える群(N=180−181)	3.52 0.87	3.28 0.93	2.82 0.79	3.56 1.02
中間群 (N=183−184)	3.59 0.80	3.39 0.86	3.00 0.70	3.57 0.86
環境が整っていると考える群 (N=46−47)	4.04 0.94	3.89 0.93	3.40 0.94	3.17 0.99
	F=7.18 ***	F=8.77 ***	F=10.82 ***	F=3.44 *

(***P<0.001　**P<O.01　*P<0.05)

(a)：環境の充足度の評価が、５段階評定の１と２のものを高群、３と４のものを中群、５のものを低群とした。
(b)：環境の充足度の評価が、５段階評定の１のものを高群、２と３と４のものを中群、５のものを低群とした。

その結果、「大型の移動のできる遊具を使った遊び」、「散歩」、「かけっこ、リレーなどの走る遊び」、「リズム体操、フォークダンス、ダンスなど音楽に合わせて動く運動遊び」、「水遊び（プール遊び）」の５項目において有意な差が見られた。しかし、「大型の移動のできる遊具を使った遊び」、「散歩」、「水遊び（プール遊び）」の３項目については、全体としては戸外遊び場の広さに関する保育者の意識による有意差が見られたものの、３群間の対比較では有意差は見られなかった。他の２項目の対比較の結果は、「かけっこ、リレーなどの走る遊び」については、環境が整っていると考える群と中間群に有意差が見られ、環境が整っていると考える群が評価が高かった。「リズム体操、フォークダンス、ダンスなど音楽に合わせて動く運動遊び」については、環境が整っていないと考える群と環境が整っていると考える群に有意差が見られ、環境が整っていると考える群が評価が高かった。

２）園における室内遊び場の広さに関する保育者の意識による、意図的に取り入れる必要度15項目における差異を検討し表６に示した。

その結果、15項目中有意な差が見られたのは、「水遊び（プール遊び）」の１項目のみであった。対比較の結果、「水遊び（プール遊び）」は、環境が整っていると考える群と中間群に有意

差が見られ、環境がととのっている群が評価が高かった。

3）散歩環境に関する保育者の意識による、意図的に取り入れる必要度15項目における差異を検討し表6に示した。

その結果、「散歩」、「鬼ごっこ、かくれんぼ、長縄とびなど集団で行う運動遊び」、「花いちもんめ、だるまさんがころんだなどわらべうた遊びやその他の伝承遊び」、「ウルトラマンごっこ、あんぱんまんごっこ、ままごとなどのごっこ遊び」の4項目において有意な差が見られた。対比較では、「散歩」、「鬼ごっこ、かくれんぼ、長縄とびなど集団で行う運動遊び」については、環境が整っていると考える群と中間群に有意差が見られ、環境が整っている群が評価が高かった。「花いちもんめ、だるまさんがころんだなどわらべうた遊びやその他の伝承遊び」については、環境が整っていると考える群と環境が整っていないと考える群に有意差が見られ、環境が整っていると考えるほど評価が高かった。「ウルトラマンごっこ、あんぱんまんごっこ、ままごとなどのごっこ遊び」については、3群間それぞれに有意差は見られないが、環境が整っていないと考える群が最も評価が高かった。

表6　環境の充足度と運動遊びの意図的に取り入れる必要度に関する意識

環境の充足度	大型の移動のできる遊具を使った遊び	散　歩	かけっこ、リレーなどの走る遊び	鬼ごっこ、かくれんぼ、長縄跳びなど集団で行う運動遊び
戸外遊び場の空間の広さ（a）				
環境が整っていないと考える群(N=61−65)	4.06 0.79	4.34 0.85	4.06 0.91	N.S.
中間群 (N=126−129)	3.87 0.74	4.06 0.89	3.79 0.78	
環境が整っていると考える群 (N=211−214)	4.08 0.79	4.30 0.96	4.02 0.95	
	F 3.04 *	F 3.30 *	F−3.21 *	
室内遊び場の空間の広さ（a）				
環境が整っていないと考える群(N=132)	N.S.	N.S.	N.S.	N.S.
中間群 (N=185)				
環境が整っていると考える群 (N=94)				
散歩に適した環境（a）				
環境が整っていないと考える群(N=33)	N.S.	4.24 0.92	N.S.	3.88 1.01
中間群 (N=158−161)		4.06 0.83		3.98 0.86
環境が整っていると考える群 (N=211−216)		4.36 0.98		4.24 0.92
		F=4.57 *		F=4.80 **
大型遊具の遊び環境（b）				
環境が整っていないと考える群(N=32−33)	N.S.	N.S.	N.S.	N.S.
中間群 (N=284−286)				
環境が整っていると考える群 (N=91−92)				
リズム運動の遊び環境（b）				
環境が整っていないと考える群(N=180−181)	4.11 0.76	N.S.	3.97 0.90	N.S.
中間群 (N=183)	3.90 0.79		3.87 0.91	
環境が整っていると考える群 (N=46)	4.07 0.73		4.26 0.76	
	F=3.27 *		F=3.55 *	

有意差の見られた分析の数値のみを示した。

(a)：環境の充足度の評価が、5段階評定の1と2のものを高群、3と4のものを中群、5のものを低群とした。

(b)：環境の充足度の評価が、5段階評定の1のものを高群、2と3と4のものを中群、5のものを低群とした。

4）大型遊具の遊び環境に関する保育者の意識による、意図的に取り入れる必要度15項目における差異を検討し表6に示した。

その結果、「花いちもんめ、だるまさんがころんだなどわらべうた遊びやその他の伝承遊び」、「ウルトラマンごっこ、ままごとなどのごっこ遊び」の2項目において有意な差が見られた。対比較の結果は、2項目いずれも、環境がととのっていると考える群と環境が整っていないと考える群に有意差が見られ、環境が整っていると考えるほど評価が高かった。

5）リズム体操の遊び環境に関する保育者の意識による、意図的に取り入れる必要度15項目における差異を検討し表6に示した。

その結果は、「大型の移動のできる遊具を使った運動遊び」、「かけっこ、リレーなどの走る運動遊び」の2項目に有意な差が見られた。対比較では、「大型の移動のできる遊具を使った運動遊び」については、環境が整っていないと考える群と中間群に有意差が見られ、環境が整っていないと考える群が評価が高かった。「かけっこ、リレーなどの走る運動遊び」については、環境が整っていると考える群と中間群に有意差が見られ、環境が整っていると考える群が評価が高かった。

リズム体操、フォークダンス、ダンスなど音楽に合わせて動く運動遊び		花いちもんめ、だるまさんがころんだなどわらべうた遊び、伝承遊び		ウルトラマンごっこ、あんぱんまんごっこ、ままごとなどのごっこ遊び		水遊び（プール遊び）	
3.75	1.11	N.S.		N.S.		4.06	1.15
4.01	0.80					4.10	0.85
4.20	0.87					4.36	0.99
F=6.29	**					F=3.81	*
N.S.		N.S.		N.S.		4.18	1.10
						4.14	0.95
						4.47	0.85
						F=3.76	*
N.S.		3.85	0.86	3.73	0.93	N.S.	
		4.03	0.72	3.23	0.96		
		4.22	0.80	3.50	1.18		
		F=4.71	**	F=4.34	*		
N.S.		3.88	1.02	2.94	1.35	N.S.	
		4.09	0.75	3.38	1.04		
		4.29	0.76	3.66	1.07		
		F=3.85	*	F=5.81	**		
N.S.		N.S.		N.S.		N.S.	

(***P<0.001　**P<0.01　*P<0.05)

考　　察

1　保育者の園児の運動遊びに対する意識

この度の調査から保育者は、子どもたちの運動遊びの充足度については、かろうじて充足していると考えていることが把握できた。子どもたちの多様な運動の経験や一日の運動量は、やや肯定的な結果となっているが、現状で満足しているのではないことは、保育者が「運動遊びの時間をもっと与えたい」と思っている結果から推察できる。日本の子どもの遊びは1960年代に第1の変化があり、遊びの縮小が問題にされた。更に1980年代に入ってからは第2の変化ともいわれる遊びの質的な変容が指摘され、特に仙田によれば「遊びに当てる時間や外遊びの減少など内容の変化が著しい」[1)]と言われている。子ども全体がそのような傾向であっても、調査にあたっては少なくとも保育園や幼稚園における子どもの運動遊びは、園庭や原っぱで、真っ黒になって十分に遊んでいるという姿が提示されることを期待していた。しかし、結果は現状に満足せず、子どもたちにもっと運動遊びをさせたいと願う保育者の思いが表されていた。遊びそのものが生活であるといわれる幼児期の子どもたちでさえ、運動遊びがやや十分としか保育者に評価されない傾向が明らかになったことは、保育現場で園のカリキュラムを検討する際には、一考を要する事項であろうと思われる。特に、子どもたちの遊びがある種の運動に偏らず、バランスのとれた遊び方であるかについての保育者の意識が否定的な傾向であったことは、子どもの運動遊びを考える上で大きな意味をもつものであると考える。

幼児期の多様な運動経験が如何に重要であるかは、多くの先達により明らかにされているが、K.Meinelは、幼児期における運動発達の特徴として急速性、並列性、同時性をあげ、「歩く、走る、跳ぶ、投げる、受けるなど運動の基本形態ははっきりした順序で習得されるのであるが、ひとつの形態が完全にマスターされてからやっと次の新しい発達順序が始められるのではなく、特に「園児期」には異質の形態が並列的で、同時性をもって行われることが特徴である」[2)]としている。すなわち、歩くことができるようになった後には「こどもは歩くことといっしょによじ登りを覚え、歩くことと同時に持ち運ぶことを覚え、最後に走と跳ないしは捕と投といった基本形態の組み合わせを始めて試みるのである。」[3)]このことからマイネルは、運動発達の面から幼児期の望ましい運動遊びのあり方は、いつも同じような運動形態の遊びを繰り返しトレーニングのように行うのではなく、いろいろな基本形態の運動が経験できる遊びを、楽しくしかも並列的に、同時的に行うことが大切であると示唆している。したがって「自主的な遊び」を標榜する保育では、幼児の自主性を尊重する余り放任に陥ることなく、必要な運動を多様な遊びとして経験させ、運動技能の獲得を容易にしたり、子どもたちの心身の発育発達を促進するよう、保育者が十分配慮して、楽しく遊ばせる工夫が不可欠であると考えられる。

次ぎに、保育者が意図的に保育に取り入れたいと考えている運動遊びについて論を進める。

「水遊び」、「散歩」、「伝承遊び」、「鬼ごっこ、かくれんぼ、長縄とびなど集団で行う運動遊び」、「リズム運動」「手具を使った遊び」などの遊びは、いづれも保育者が子どもたちの運動遊びとして意図的に取り入れる必要があると強く思っている遊びである。また「かけっこ、リレーなど走る運動遊び」「ドッジボールやサッカーごっこ、野球ごっこ、ホッケーごっこなどの集団ボールゲーム」「アスレチック系の固定遊具」「高い所にのぼって遊ぶ」「ヒーローごっこ」「相撲」「ブランコ、ジャングルジムなど固定遊具を使った遊び」「乗り物遊び」などは、意図的に取り入れる必要はあるとはいっても、必要度の平均値は前述の遊びに比して低くなっている（表2）。これは、子どもたちが既に十分に遊んでいる遊びとして認識しているか、または、

他の遊びで代替できるので園では余り行われていない遊びとしているか、年齢相応の適時性がないと判断しているかなど理由は明らかでないが、保育者が意図的に取り入れる必要性を余り強く感じていない傾向が把握できた。

また、幼児の運動遊びを年少児から年長児までの平均値で見るのではなく、発育発達との関わりを考慮して運動遊びを論述するために、保育者の受け持ちクラスによる運動遊びの必要度の差異を検討した。結果は、「水遊び」、「散歩」、「伝承遊び」、「リズム運動」は年少、年中、年長、混合の全ての受け持ちクラスでクラス間に有意な差はないが、どのクラスの保育者も意図的に取り入れたいと強く肯定的に考えている遊びである。換言すれば、これらの遊びは、内容に年齢差はあっても、幼児期には欠くことのできない運動遊びであり、保育者の工夫と働きかけ（環境設定）に負うところが大きい遊びといえよう。

保育者の受け持ちクラスにより意図的に取り入れる必要度に差異があった遊びは、「かけっこ、リレーなど走る運動遊び」は年少クラスより年中クラスの方が、「ドッチボール、サッカーごっこ、野球ごっこ、ホッケーごっこなどの集団ボールゲーム」は年齢が高くなるほど、また単一年齢より混合クラスほど必要度が高く、「ごっこ遊び」は年長より年少クラスのほうが必要度が高いなど有意な差異がみられ、遊びにおける運動の適時性が明確に表れている。

2　保育者の子どもを遊ばせる環境の充足感と運動遊びに対する意識

園児が健康で活発な子どもに育っていくことを願わない保育者はいないと思われるが、活発に運動遊びを展開するためには、先ず遊びの環境が整っていることが大切であると考えられる。

本調査では環境について第１に問題にしたのは、運動遊びは戸外、室内のいづれで多く行われているのかということである。小黒の調査によれば、「日常生活が活動的な子どもは「戸外でよく遊ぶ」、「友だちとよく遊ぶ」、「近くに運動遊びに適した遊び場がある」などと有意な正の相関関係が認められており」[4)]、活動的な動きのよい子を育てるには、運動遊びは戸外で多く行われることが大切な要因になると考えている。結果は「戸外でよく行う」としている保育者が多く、望ましい傾向であることが把握できた。

第２に問題にしたのは、遊びを行う場所の広さが子どもの運動遊びにどのような影響があるかということである。本調査では、運動遊び場に対する保育者の認識は、戸外の遊び場に関しては、広さはやや十分であり、近所には散歩に適した場所もあってかなり整っていると見ている。それに比して室内の遊び遊び場に関しては、広さは十分満足する広さではないが、一応は整っているとしており、戸外環境に比してやや劣る評価となっていた。このことからも運動遊びは戸外で多く行われれば、場の広さに関してはよりよい条件で遊びが展開できることになる。

また、保育者の場所の広さに対する意識と子どもたちの運動の充足度に対する意識をみると、保育者が戸外、室内を問わず、遊び場の広さが十分であると認識しているほど、子どもたちの運動遊びは、いろいろな遊びを十分に行い、一日の運動量も十分であり、内容がバランスのとれた遊び方をしていると感じている傾向である。逆に、保育者が戸外、室内を問わず遊び場の広さが十分でないと認識しているほど、子どもたちに一日の運動時間をもっと与えたいと思っている傾向であり、遊ぶ場所の広さが十分であることは、子どもたちの活発な運動遊びを保障する大切な要因であることが確認された。

第３に問題にしたのは、遊具の設置状況である。特に、マット、跳び箱、鉄棒、平均台、巧技台などがない園はほとんどないと思われるが、それらが常に設置してあり、子どもたちがいつでも遊べる状態が整っているかどうかが、遊具の有効利用と深く関係してくる。そこで保育者の大型遊具の環境に対する意識と、子どもたちの運動遊びの充足度に関する意識にどのような差異が

あるのかを見ると、保育者は、大型遊具については、一応整っているとやや肯定的に見ており、前述の場所の広さとの関係と同様に、保育者が大型遊具が整っていると認識してほど、子どもたちの運動遊びは十分に行われており、一日の運動量も十分であり、バランスのとれた遊び方になっていると見られる。また、逆に保育者が環境が整っていないと考えているほど、子どもたちに一日の運動遊びの時間をもっと与えたいと考えている傾向であった。大型遊具は設置してあるだけでなく、いつでも子どもたちが使える状態になっていることが、子どもたちの活発な運動遊びを保障する大切な要因の一つとなっているのである。

最後に問題にしたのは、リズム運動の遊び環境についてである。幼児期のこどもは、リズムダンスやリズム体操など音楽に合わせてからだを動かすことは非常に好む傾向にあるが、園全体で毎朝取り組むとか、運動会や発表会などの「行事に行うためにあることが多く」[5]、幼児が自ら行う遊びとはなりにくいのではないかと考えている。リズム運動を子どもたちの自主的な遊びに位置づけるには、好きな曲をいつでもかけて遊ぶことができる環境づくりが不可欠と考え検討した。結果は、音響設備の常設度は否定的な結果となっており、子どもたちが自由に音楽をかけて行う環境はほとんど整っていないことが明らかになった。リズム運動をもっと自由遊びとして定着させるには、子どもの好きな曲がいつでもかけられ、楽しく動くことができる環境設定に工夫の余地があるように考えられる。

3　遊び環境の充足度と意図的に取り入れたい遊び

保育者は、運動遊びの環境が「整っている」、「整っていない」、「どちらともいえない」のいづれの評価をしているのかにより、意図的に保育に取り入れたい遊びに差異があるのかについて検討した。

運動遊び場の広さの充足度に関する意識と意図的に保育に取り入る必要度の意識との間に有意差が見られた遊びは、「かけっこ、リレーなど走る遊び」「リズム体操、フォークダンス、ダンスなど音楽に合わせて動く運動遊び」であり、これらは戸外の遊び場の広さが十分であるとしている保育者ほど、意図的に取り入れたい遊びとしている。かけっこ、リレーなど走る遊びは、十分な広さを生かして遊べる遊びであり、意図的に取り入れたいと考える傾向は当然の結果であると思われる。また、リズム運動系は、戸外遊び場が広く整っている園は、日常的に戸外遊びは十分に行っているので、リズム運動系の遊びが不足していると感じている保育者が多いのではないかと推察できる。リズム運動系の遊びは、戸外で遊ぶより室内で遊ぶことが多いように思われ、戸外で遊ぶ場合は、固定遊具を使った遊びや、砂遊び、集団ゲームなど戸外でなければできない遊びが活発に行われるのであろうと思われる。また、リズム運動などは子どもたちが自主的に取り組んで遊ぶとは考えにくく、保育者の余程の援助がなければ、自然に子どもたちがリズム運動を始めるということは考えにくいように思う。

一方、保育者の運動遊び場（戸外、室内双方）の広さの充足度に関する意識とは有意差がなかった遊びは、「鬼遊び、かくれんぼ、長縄跳びなど集団で行う運動遊び」「花いちもんめ、だるまさんがころんだなどわらべうた遊びやその他の伝承遊び」「ウルトラマンごっこやあんぱんまんごっこ、ままごとなどのごっこ遊び」などであった。これら３項目の遊びは全て「散歩に適した場所が整っている」との間に有意差があり、「花いちもんめ、だるまさんがころんだなどわらべうた遊びやその他の伝承遊び」「ウルトラマンごっこやあんぱんまんごっこ、ままごとなどのごっこ遊び」の２項目は更に「大型遊具の遊び環境がいつでも遊べるように整っている」との間に有意差がみられた。すなわちこれら３項目の遊びは、遊び場の広さによって保育者の遊びの選択が左右されるのではなく、むしろ、散歩に適した環境が整っているどうかにより、環境が整ってい

ると考えるほど、保育者が意図的に取り入れたいと考える遊びであることがわかる。保育者は、散歩に適した場所にでかけ、時間や気持ちにゆとりがある時に、自然の中でこそ遊具などを必要としないこれらの遊びを十分に取り入れたいと考えるものと思われる。また、「花いちもんめ、だるまさんがころんだなどわらべうたあそびやその他の伝承遊び」「ウルトラマンごっこやあんぱんまんごっこ、ままごとなどのごっこ遊び」の2項目は、「大型遊具の遊び環境が整っている」との間に有意差が見られ、マットや跳び箱、巧技台など大型遊具が常設されて整っていれば、遊具を山や川、家などに見立てたり、遊具の空間を利用するなどして伝承遊びやごっこ遊びをもっとさせたいという保育者の願いを読みとることができる。

「水遊び」は室内遊び場の広さとの間に有意な差がみられ室内遊び場が十分であると感じるほど、意図的に取り入れたいと考えているが、どの群も平均値は4.00以上と高く、遊び場の広さの充足度に関する認識に関わらず意図的に取り入れる必要度の高い遊びとして捉えられよう。

また、「散歩」は散歩に適した場所が整っていると感じているほど、保育者は意図的に取り入れたいと思っており、近隣に散歩に適したよい環境があれば、有効に利用したいとする保育者の願いが読みとれる。

子どもの生活は遊びそのものであり、子どもは遊びの天才であると言われるが、運動遊びを活発に十分楽しむためには、やはり仙田が指摘するように「豊かな環境すなわち余裕のある気持ちと空間」[6)]が必要である。豊かな自然や、広々とした空間、常に設置されている魅力的な遊具などは、子どもたちの気持ちを伸びやかにし、その中で夢中に遊んでこそ健康な心身の発育発達が保障されるのであろうことが確信された。

ま と め

本調査より以下のことが明らかになった。

1　保育者は子どもたちの運動遊びはかろうじて充足していると考え、多様な運動経験や一日の運動量はやや充足しているが、現状に満足しているわけではなく、一日の運動時間はもっと与えたいと考えている。

2　保育者が意図的に取り入れたいと考えている遊びは平均値の高い順にあげると、「水遊び」、「散歩」、「伝承遊び」、「鬼っごこ、かくれんぼ、長縄とびなど集団で行う運動遊び」、「リズム運動」「手具を使った遊び」などの遊びとなっており、いづれも必要があると強く思っている遊びであった。

3　保育者の受け持ちクラスにより意図的に取り入れる必要度に差異があった遊びは、「かけっこ、リレーなど走る運動遊び」は年少クラスより年中クラスの方が、「ドッチボール、サッカーごっこ、野球ごっこ、ホッケーごっこなどの集団ボールゲーム」は年齢が高くなるほど、また単一年齢より混合クラスほど必要度が高く、「ごっこ遊び」は年長より年少クラスのほうが必要度が高いなど有意な差異がみられ、遊びにおける運動の適時性が明確に表れていた。

4　運動遊びの環境についての保育者の意識は、運動遊びは戸外で多く行い、戸外の広さはやや十分であり、室内の遊び場の広さは戸外よりやや劣ると評価している。また近隣に散歩に適した場所はやや整っていると評価している。大型遊具については、子どもたちがいつでも使えるようになっているかどうかについては、遊具により差があるものと推察され、どちらともいえない評価となっている。またリズム運動系のあそび環境は、ほとんど整っていないと評価している。これらの環境は整っているとしている保育者ほど、子どもたちの運動遊びの充足度は高いと考えている。

5　保育者が、運動遊びの環境が「整っている」、「整っていない」、「どちらともいえない」のいづれの評価をしているかにより、意図的に保育に取り入れたい遊びに有意な差異があった遊びは、以下のとおりであった。

①　運動遊び場の広さの充足度に関する意識と意図的に保育に取り入る必要度の意識との間に有意差が見られた遊びは、「かけっこ、リレーなど走る遊び」「リズム体操、フォークダンス、ダンスなど音楽に合わせて動く運動遊び」で、戸外の遊び場の広さが十分であるとしている保育者ほど、意図的に取り入れたい遊びとしている。また、「水遊び」は室内遊び場の広さとの間に有意な差がみられ室内遊び場が十分であると感じるほど、意図的に取り入れたいと考えている。

②　運動遊び場の広さの充足度に関する意識とは有意差はなく、「散歩に適した場所が整っている」との間に有意差のみられた遊びは、「鬼遊び、かくれんぼ、長縄跳びなど集団で行う運動遊び」「花いちもんめ、だるまさんがころんだなどわらべうたあそびやその他の伝承遊び」「ウルトラマンごっこやあんぱんまんごっこ、ままごとなどのごっこ遊び」などで、散歩に適した場所が整っていると考えている保育者ほど、これら３項目の遊びを取り入れたとしている。

③　「大型遊具の遊び環境がいつでも遊べるように整っている」との間に有意差がみられた遊びは、「花いちもんめ、だるまさんがころんだなどわらべうたあそびやその他の伝承遊び」「ウルトラマンごっこやあんぱんまんごっこ、ままごとなどのごっこ遊び」の２項目であり、環境が整っていると感じている保育者ほど、これらの２項目の遊びを取り入れたいと考える傾向であった。

以上、保育園や幼稚園においては、遊び場の環境条件が子どもたちの運動遊びの行われ方に影響を及ぼすことが明らかになり、「環境による教育」の理念を再認識させられた。

参考・引用文献

1）仙田　　満「子どもとあそび」岩波新書　1996年11月　P.154
2）クルト・マイネル著　金子明友訳「スポーツ運動学」　1983年11月　P.299
3）同　書　　P.300
4）小黒美智子「幼児の運動遊びに関する研究－遊び場の固定遊具の活用に関する調査から－」新潟青陵女子短期大学研究報告第26号　1996年3月　P.31
5）小黒美智子「幼児の体操に関する研究－保育園（所）における実態調査から－」新潟青陵女子短期大学研究報告第24号　1994年3月　P.98
6）前掲書１）　　P.150